

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

子つばめの翼受けに敷く新聞の社会面なり記事汚
れゆく (伊那市) 中村 初治
「僕も病む」とうナイーブな医師に診てもらう老
猫声もあけず従う (佐久市) 篠原 敬子
一寸先読めないことはしあわせと気づきつ焦げし
煎餅餅食む (木祖村) 佐々木千代子
臥す妻が土座に買った気に入りの風鈴吊し夜風を
待てり (東御市) 沢田 司
帰宅部というは死語なり部活動すべてが中学校よ
り消えて (長野市) 原田りえ子
越後より昔数多の早少女さん耕姿美し早業なりき
酒漫りの夫に苦勞と言ひし叔母遺作の絵にはお猪
口が二つ (埴田町) 池田よし江
さよならと別れた後に二人とも振り返ったから今
があります (松本市) 点と 弧
いつこより忍冬匂ふ終はりたる検査の結果に安
らぎあり (長野市) 近藤 光子
館長の「熊には熊る」には「熊は熊なく捜して」
と返信す (千曲市) 石黒 信幸
佳作
千曲川アカシヤの花咲き揺れて新幹線は今鉄橋渡
る (飯山市) 小野沢竹次
九十の姉菊苗をさし芽から育てる日々を愉快に語
る (松川町) 小川 陽子

第一首、巣の下に敷かれた新聞にはど
んな記事が載っていたか。酷い記事を隠
すように汚れたのかも。第二首、自分も
病むし、弱い、とわかっている医者はき
っと優しい。猫にもわかるのかも。味の
ある展開の一首。第三首、溶いた小麦粉
に垂を入れて焼く昔ながらの信州の食べ
物。焦けても美味しいのだ。上旬は蔵書
のよう。第四首、妻が元気だった頃の旅
を思い出させる音。優しい歌だ。

選 評

小池 光 選

天津甘栗のあまきにほひが受験生われをむかへて
くれし東京 (長野市) 原田 浩生
感情を押さえ切れなく奇立ちて目の前にある窓坊
主打つ (辰野町) 矢島あさ子
真ん中の診察室は女医さんか茶話会のこととき笑ひ
声して (安曇野市) 一志みゆき
天井の板目の模様変わらざり幼き頃も年老いた今
も (佐久市) 中田 恭子
鬼こっこまた隠れん坊暮るるまで遊びし友よいか
に在すや (麻績村) 塚原ふじ子
豊後梅水砂糖に漬け込んでマラカスふるよう毎日
瓶ふる (千曲市) 関 津和子
黄の薔薇の花に囲まれ美輪さんはありがとうとそ
言ひて旅立つ (伊那市) 中村 初治
亡き母が縫ってくれたる浴衣きて盆踊りの宵のと
きめき思ふ (長野市) 近藤 光子
さびしさに家を立ち出てながむれば鳩はひたす
ら巢をつくりたり (埴田町) 藤森 円
完熟のトマトに塩を一振りすこの単純に旨き極ま
る (箕輪町) 向山 政俊
佳作
曲がったキウリ不揃ひのトマトひねたナス菜園楽
し今朝の収穫 (中野市) 小林かつ子
鬼灯をかばんに忍ばせ帰り道女子に渡した小2の
想い出 (伊那市) 竹松 徳門

第一首、今はすっかり見なくなったが、
昔は駅の構内でよく売っていたものだ。
その甘い香りに受験生は「東京」を感ず
る。ユニークな視点が良い。第二首、何
か激高することがあって、感情を押さえ
きれず思わず目の前の窓坊主をぶんなぐ
ってしまった。これもユニークな行動。
おもしろい。第三首、診察室が三つくら
い並んでいて、先生と患者の笑い声がき
こえる。診断の結果がよかったのだ。

選 評

小島 なお 選

一瞬の春に生まれたこの人がピラスみたい揺ら
す熊鈴 (東京都台東区) 幽
自転車も眠りたいのだ月光の駐輪場をなでゆく
風 (熊本市) 夏風かをる
梅雨明けは天辺まで咲いてからと誰かが言つた
立葵の花 (辰野町) 矢島あさ子
黒色の麻婆豆腐が食べたくて甜麺醬とホアジャオ
を賣う (東御市) 竹内 幸彦
「ちいちゃんこれ、なかなだね、ばっただよ、
ふくらにあなね」とベトナムの子 (千曲市) 石黒 信幸
合歡の花風のゆふぐれ唯一の町の本屋もいつしか
消えたり (長野市) 近藤 光子
読経する僧の手先は香を焚き鉦を鳴らして香炉を
廻す (長野市) 宮崎 昌
かけ登る猫をかくせし柿若葉はほほほと木も
れ日つくる (長野市) 北沢 亨子
駅前夫人の像を夏の陽は焦がすばかりに照らし
ておりぬ (小諸市) 星野 直人
鬼の顔取るが子供の役割の昔を思い伸びた草刈る
る (佐久市) 小泉 英介
佳作
姉姉子兄正二郎われ春子空き家の表札傾いており
能越き祖父の開墾山畑田圃植えて彼らに返す
(佐久穂町) 太田 春子
(木曾町) 新村 亮三

第一首、短い春に生まれたその人。熊
鈴を耳元で鳴らしてみせる姿の初々しさを
慈しむように眺める。第二首、ハンド
ルをスポークをサドルを照らす月光。夜、
ひとときの休息にふかふかと静まる駐輪
場。第三首、夏に向かって咲き登る立葵
の花。誰かの声をまた今年も思いながらい
よいよ暑い夏が来る。第四首、唐辛子
と豆板醤の赤のキレある辛さも美味し
いけれど。今夜はコクと痺れの黒の気分。

選 評